

---

# 透明熊の手

Y - m a

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

透明熊の手

### 【Nコード】

N0317Y

### 【作者名】

Y - m a

### 【あらすじ】

自分のことを猛者と名乗る凄腕霊媒師、ごんきち厳吉は、とある理由で必要となった霊媒師の必需品、透明熊の手を探しに山へ入ったのだが、そこには冥界へ通じる穴が空いていた

壱

縁起を担いだのに、うまく行かなかった…

と思ったら、実は良い出来事が起きていた…

そんな気分だ

「人が死ぬとはどういうことだったか？」

私は厳吉ごんきち霊媒師をやっている

霊力は凄まじく山彦に英訳させたりできるほどだが…

人は現金なものだ

「なっ？英訳されただろ？私のヤッホーがハローになっただろ？と再三尋ねてやっと。はい、わかりました。と来た…」

山彦より出来が悪いんじゃないか？

まあ…喻えが悪かったな…とにかく霊力は凄まじいのだ…

そんな私がセーラー服を纏った老年のジジイの死体に出会した…

可哀想に痩せこけた足が、最初いやらしく見えたが、自ら頭を小突いて目を覚ました…

このジジイは何が狙いだっただのか？

勃起はない…断じてない！！

私は透明熊の手という霊媒師の必需品を探しに山に登ったのだが…

私の目からは霊媒師ゆえ、死んでいると分かるのだが…

いったい私を発見者と純に見る奴はいるだろうか？

「目を覚ませっ！！変態が！！」

私は霊媒師としてではなく、人として話しかけた

しかし、良い兆しだ

透明熊の手はこの辺りにある

式

「ん…ん…はて？私はここで何をしていたんだ？」

馬鹿なことがあった。私の選別眼を覆すようにジジイが目を覚ましたのだ

まるで、女子高生と魂が入れ替わったかのような寝ぼけ眼でジジイは私を発見した

「はて？じゃないだろう？何という格好をしているんだ？」

ジジイは辺りを見回し、私を見た…



「て、天狗か？」

ま、まあ無理もない  
私も霊媒師の端くれ格好は天狗のやうだが…いやいや、高能たる霊  
媒師所以の立ち振る舞いぞ？

してやるか？

「そうだっ！！私はこの霊峰を司る天狗である…どれ？何か業を見  
せようか？」

「いえ…私は本物の天狗にまだ死んでは駄目だと蘇られましたから…お腹一杯なんです。」

ジジイは首を縦には振らなんだ…

何？本物の天狗だと？  
確かに「天狗のやうなもの」と「本物の天狗」では、信憑性が甚だ違うのだが…

「風よ吹けっ！！」

私はジジイの意見に関係なく風を起こした

突風はジジイを天高く舞い上げ、そして、地面に叩きつけた

ジジイはまた…動かなくなった…

参

ジジイは動かなくなったが、それでいい…  
元々そうだったのだから、指針がイカれてしまつよりはいいんだ…

透明熊の手は山が正常でないと現れないのだ

信号機のように赤青黄色と規則性がないわけじゃないが、あるとも  
言い難い

しかし、正常でないと現れないのだ

「うっ、うっっ…痛い…腰が痛い…」

また馬鹿なことになった…

ジジイの奴が死んでなかったのだ…

「お、おい…いい加減にしろよ？変態め…冥界の天狗とやらが私にイヤがらせでもしてるんじゃないか？」

ジジイは恨めしそうに私を見た

「冥界の天狗などと名乗った覚えはない…しかし、おまえはいつ覚えるのだ？透明熊の手は私が手渡す寸法だろ？」

はっ！！

思い出した…飽き飽きするほどの現実だった

セーラー服を来たジジイが透明熊の手など霊媒師グッズを与えてくれていることに…

「はっはははっ…すっかりセーラー服に気を取られてしまっ…そうだそうだ…あなたから透明熊の手を受け取るんだったか。ありがたや、ありがたや…して、透明熊の手とは何だったか？」

怪訝な表情を露わにし、ジジイはゆっくり口を開いた

「ほれ？手を出せ」

言われるままに手を出した

パチンッ

私はジジイとタッチをした…途端に目の前に天狗が現れた

いや…人間か？

「痛い…腰が痛い…」

腰が痛いし、目線が座り込んだように低い

「ダハハハッおまえなんて格好だ！次の天狗が来るまでに透明熊の手を準備しとくんだな？さらばだっ！！」

天狗が…巖吉が…私が去っていった…



空が不規則にグルグル回る…ああ…私は誰になったのか？

虚ろな眼はやがて闇を探し始めた

## 肆

透明熊の手とは本来、天照大神の許諾なしには生まれない契約であるのだが、冥界にはどうやら別の方法があるようだ…

「天照大神は一定した価値観をお持ちだからな…身を振るように冥界を生き抜けば、その力を自由にできるときが一刻だけあるんだ…」

独り言のようにスルスルと疑問の答えがでた  
私が発した言葉だが、はてさて…冥界が呼んでいるのか

私の体は言うことを聞かない…いや、よく聞いて考えているやうだ…  
全く動かない

セーラー服を脱ぎたい衝動に駆られたが、体中がむず痒くなる感覚に襲われたが…それ以上の絶望が考えを巡らせていた

「あーっなるほど…つまり、この体の主は冥界の力を借りて本来私が譲り受けるべき透明熊の手を横取りしたわけか…」

読めたぞ…

あのジジイは確か冥界で天狗と会っていたな…

本来ならば、私がその天狗と透明熊の手を介し体を入れ替える寸法だったわけだな…

「ったく…目印のくせに出しゃばりやがって…」

と言いながらも、私は意に知れない安堵感に少しずつ癒され始めていた

森の息づかいや体にそつと添えられた幾枚かの葉っぱ…体さえ戻れば、言霊を操り一祭り起こせるのに…

あのジジイはどこへ消えたんだ？

## 伍

入れ替わった意識がやがて体に馴染んでくる…  
恐ろしいほどにだ

どうしたらいいんだ？このままではセーラー服を来た怪しい痩せっ  
ぽうちのジジイになってしまう…

まるで…私が初めからここに倒れていたみたいだ…

まさか…

「そういうことか…」

弱くなった自尊心がやがてもっともらしい憶測を呼んだ

つまりだ。最初から二つの意識が存在し、天狗を仲介人として定期的に入れ替わっていたとしたら？

私の記憶が浮き上がって、錯誤していた点も俗世に揉まれたが故だとしたら？

その二つの意識を自由に切り替える主導権を所有しているのは…

「冥界にある天狗というわけか…透明熊の手と言っわけだが…如何せん腑に落ちん…まだまだ私は目が黒いままだっ…だが」

私はまるで、このセーラー服を着たジジイの人生を辿るかのような屈辱感に苛まれながらも、決意した

冥界へ…私は冥界へ行かねばならない…逝かねば…

陸

冥界：冥界とは何だろうか？

人は楽しい時間ほど早く感じ、苦しい時間ほど長く感じるものだが…

冥界は文字通り地獄…

愛を語れば、その分体の自由が奪われる場所だ

極楽とは違う…



冥界の天狗とは何だろうか？

どうやってこのジジイは冥界から蘇ったんだ？

「一度死ななければならぬのか？」

いや…それでは芸がない。と言うよりそのまま意識が消滅してしまっただろう？

一体どうやって冥界へ逝ったのか？

冥界の天狗はすでに役目を終え、次の場所へ去ってしまったのかも  
しれない…

「弱気になるなっ！！私は必ず…冥界の天狗になってみせる！！」

力ない、か細い声だったが、しっかりとした覇気を帯びていた…

「しかし、このまま寝たきりの方が良いのか…一度自由になり自分の  
体を探すべきなのか…」

さて、私の体は動くだろうか？

漆

「フハハハッ戻ってきてやったぞ？貴様のことだ。俗世に揉まれ記憶を無くし、透明熊の手を貴様と交わすとても思っていたんだろう…当たり前だ…私に思い残すことはない…。記憶など無くて良い…」

私の体が戻ってきた…

意外というか

私はまた力が抜けていくのを感じた

「ど…どういうことだ？私の霊力では本物の天狗には適わないというのか？」

絞り出すように声を出した…

「娘に会いたくてな…時空を遡っていたんだよ…しかし、遡りすぎた…この時代には娘は疎か、私さえも産まれていない…元居た時代に帰らねば…」

それはそうだ

私の生まれた時代はまだ戦国時代

人の業に嫌気がさして未来に何度も足を運んだものだ…

セーラー服なるものも承知しているが…

男が着るものではない…

「どちらにせよ。その体は返ってくるのだな…お前も霊媒師なのか？」

男は少し困った顔をした…

「霊媒師？まあ…似たようなものだよ…エスパーさ…ほら、手をだしな？」

私とジジイはこうして二度目の透明熊の手を交わした

捌

やっと？自分の体が戻ってきた…

ホッとしたのも束の間、透明熊の手が与えてくれる暖かい副作用を私は忘れない…

どんな名医も患者の心の痛みまでは理解し得ないと言うが…

私にはわかる…このセーラー服を着たジジイが心に仕舞って置いた痛みが…

「お前の娘…破裂したのか？」

ジジイは涙を流した…

破裂したのか？だって？普通なら冗談の類に片付けられそうだが…

笑う奴もいるだろう…

しかし、今の私にはわかる

「私の娘は私よりも数段強力なエスパーだった…しかし、それ故に力のコントロールが利かずに…破裂した…ううっ…笑ってくれても良い…こんな話できるもんじゃない…」



力ない声はより一層増し、私の記憶と心を繋いだ…

少しの安堵感からか、笑いがこみ上げては来たが…忘れられない感情がある…

「笑うわけあるかつ！惜しいことをしたんだろ？娘をもつと厳しく育てられたら破裂することもなかったんだろ？！悔しいだろ？絶対娘に会え！！助かるかもしれないだろ？」

ジジイはさらに泣き出した

「ううっありがとう…この時代では存在しているのがやっつのような  
だ…きつと娘の破裂を食い止めてみせるよ…」

そう言ってジジイは風のようにこの戦国時代から姿を消した…

「へへっ…格好付けやがって…」

云いようのない気持ちよさが私の霊力をまた一つ強く鍛えてくれた  
ようだ…

玖

一段落着いたか…

わたしはそうだ…本物の天狗になるために透明熊の手を探していたんだっとな

「んっ？」

あのジジイの居た場所にセーラー服を着た…今度は女だ…

仰向けに倒れている

まさかっ

「先程は父がお世話になりました…私が先のエスパーの娘に当たる…ヨシコと申しまして…」

ヨシコさんか…

現れたか…

「はてさて、この戦乱の世でまた、何をなさっているのか？あなたの父君の成果であるのかな？まだ現世に身はあるようだか？」

ヨシコと名乗る女はしくしく泣き始めた

「ええ…父は…私を守るためにセーラー服でタイムトラベルをし、  
国一番の恥曝しになりました…それ故、超能力の制御ができず破裂  
してしまいました…」

そ、そうだったのか…  
それでセーラー服でタイムトラベルを…

つて、待てよ…  
セーラー服を女が着たとて恥になるものか？  
他に意味があるのか？

「国一番の恥曝しに…か…それではヨシコさんとやらが次の恥曝しにならなければ父君は破裂してしまうと言っわけかな？」

ヨシコさんはまたしくしく泣き始めた…

余程思い詰めていたんだろう

「わからないんですっ！父が最後に残した言葉、私のように生きなさい。という言葉…これだけが頼りだった…ううっ…様々な血筋から口伝された父の面影が私に当て付けられ、死ぬ思いでした…私は国一番の恥曝しの娘と…」

うーむ…これは一筋縄では行きそうにないな…  
あのジジイがそんなことを考えていたとは…

「でも…唯一あなただけが…あなた様だけが、父の愚行を口伝化していなかった愛しき人だったのです…だから、真っ先にこの時代に来ました…」

あのジジイからできた娘にしては若すぎるが…

私はどうやら頼られているようだな

## 壹拾零

しかし…娘も娘か？

この時代で未来の人間は身動きがとれないのか？

「や、疾しい気持ちはないが…そうだな…全く案がないわけではな  
いんだ…」

いきなりすぎたか、娘はサッと股を閉じた…

いきり立ちそうなのを堪えながらも、私は無きにしも非ずの案につ  
いて話し始めた

「そう警戒せんでくれ…良いか？私達、霊媒師の中では当たり前  
のように行われている、送り火と言う風習…お前達の力が霊力の類で



あるなら、有り余る霊力を他の者に分け与えると良いんだ…何も破裂するまで蓄積さす必要はないだろ？」

娘は涙も枯れ、何とか場の悪いことになってしまったが…暫し私は返事を待った

「……送り火ですか？チャリティーのように力を、…超能力を他者に分け与えると言うことで善いのでしょうか？果たしてうまく行くかどうか…私や父のような先天的なエスパーでないと…品位に欠けると言いますか…」

あまり乗り気ではないようだが…  
しかし、破裂するよりは善いだろう？

「品位か…分からなくてもないが、破裂して肉体が滅ぶよりは得策だ  
と思うがね？」

少しの沈黙とともに、山の空気が変わったことに私も気付いた…

やばいつ…

こいつはもしかすると…透明熊がでるか？

「私一人では決めかねます。母や…父が生きている時代に戻って確  
かめてきます」

一迅の風が吹いた…

娘はどうやら元の時代に帰ったようだな…

ブシュッ!!

胸が焼けるように痛んだ…

3本のひっかき傷がわたしの胸元にくつきりと付いたのだった…

「くっ…でたか？透明熊が…霊力の反動、霊力の対価…マタギに撃ち取られし山の主等の怒り…それが形になるは我が傷跡のみか…」

私は膝から倒れ込み、  
気を失った

## 壹拾壹

死んでいるだろうと…私は些か自負していたのだが、どうやら、天狗に会うでもなく、私は目が覚めた

血が辺りに広がってはいたが…傷は塞がり、熱も下がっていた…

「あー…その…なんだ天狗様か？助けてくれえ…足を…足をもがれたんじゃない…」

なにやらその筋の者らしき奴が片足を失い、這いずりながらこちらに向かってきた

頭はおろか、眉毛すらないその男は巨躯な体をえっせほっせと引き

ずっていた

私はムクツと起き上がり、男の側に寄った

「何てことだ…刃物で足を切られとるではないか？どうしあった？」

男は急に真っ青になり、叫び始めた

「あーっ！！足がない！！足がない！！あーっ！！」

どうしたものか…この男を昔から知るものならば、生やしよつてもあるのだが…

「ヨイツと…」

私はとりあえず、男の足を止血した…  
霊媒師ならこのくらい容易いものだ…

男は冷や汗をかき、取り乱していたが、我に返り始めた

「はあはあ…ありがてえ…落とし前に奴さん方、足を持って行きやがったんだ…俺はもう用なしだよ…」

その筋の者とは思ったが…だいたいが僧侶の名折れ…恨まれても困る故、治しはしたが

奴さん方とは…少々引つかかる



## 壹拾貳

「あんたすげえな…死ぬかと思ったが、みるみるうちに傷が塞がっちまった…」

木陰で私は男と話していた…

私を霊媒師と信じる者は数少ないが、こういった場合、否が応にでも受け入れてしまうものだ…

「いやっ俺はあんたを信じないねっ！悪いとは思うが、最善策だと気付いてくれ…奴さん方と来たら…鬼を飼ってやがるからな…聡明なる、人と妖怪を繋ぐ鬼…闘牙<sup>とつぎ</sup>…あいつが介錯をよくやるんだ…」

心を読まれた気がしたが、最善策と言われては受け入れずには居れないものだ…

互いに余りに早く気心が知れてしまったのだろっ…

「鬪牙…名は聞いたことはある。奴は戦場で生きるはずなんだが…落ち着いてしまったのか？」

男は思いつきり木を叩いた

「違えねえっ！！あいつは戦場で血を吸って生きるべきだった…ああ…つまり人を斬って斬って斬りまくるべきだったってわけだが…

とにかくだ…鬪牙の時代は…終わっちまったな…碌をもらったんだ…鬼の分際でな…」

碌を…

男の話に聞き入りそうだったが、いかんいかん…

私はそこはかとなく、男を気遣うことにした

「それは残念な話だ…欲の皮の厚いどこぞの主人が召しとったのだろっな？」

男はコクコクと頷いた

「違えねえ。違えねえ。鬪牙はあんたみたいな魔力を身につけちま  
って…おっかなくて仕方ないんだ…」

魔力…か

次から次に私の興味は惹かれるばかりだ

## 壹拾参

「分かりますが…鬪牙の奴はまだこの辺にいますんで…奴は俺を達磨にする気だったんですぜ？介錯するやつが…はっ、イカレてやがる」

そう言われてみれば…いくら何でもこんな山奥まで、片足斬られた状態で登ってこれるはずがない…と言うことは、処刑場はこの山と言っわけか…

「そうか…それではこの隠れ蓑を渡そう…ほとぼりが冷めるまで隠れているが良い」

私は枯れ葉を風に乗せるように集め、蓑を作った…

この蓑を纏えば、外観からは姿は見えない…

見えるとすれば、霊視のできる者くらいか？

うーむ…闘牙に通じるだろうか？

「悪いが私も鬼とやり合う気はないんでね…何とか凌いでくれ」

男は少し不満そうだったが、隠れ蓑を受け取った…

「こつ言っちゃ何だが、鬨牙の奴を欺けるだろうか？…いや、旦那の気持ちもわからなくもないんですがね…有り難いこつた…はあ…」

後ろ髪を引かれる思いだったが…せめて天狗になるまでは、鬼とは対峙したくない…

「そつ言つな…ではな？」

私は颯爽と山を駆けていった

天狗…天狗に会い、透明熊の手を交わす…それからまだあの男が生きていたら…助けてやるか…

「待てっ！お前天狗か？」

死に神を貰っちゃったか？

八頭身の鎖帷子を着た

般若の面を整頓したような面立ちの鬼…

骨肉隆々の体、腕を交差して短刀を両腕に持っていた…

天狗ではない…



まだ天狗ではないのだが…

「そ、そうだとしたらなんだと言っただ？」

鬼は右の刀を私に向けた

「片足のない男を見なかったか？天狗ならば山を把握しているだろう」

なるほど…まだ隠れ蓑を渡しきったわけではないようだな…

どうするか？

ふと、私は上の空になった

## 壱拾肆

脳内革命ってのが若干なりとも起きているのは確かだ…

天狗を探していた最中に、鬼を見つけ（見つけられた形だが）励みにはなつたのだが…まあ、鬼が居るなら天狗もこの辺に…と私らしくもない安易な発想で終わらせたのは、目の前の鬼が余りに…鬼離れしているからだ…

何をしでかすやら…

人の業を食い散らかすやうな、鬼畜ではあるまいし…

「それならば、まだ勝機はある…」

うっかり口に出してしまった私の本音を鬨牙は聞き逃さなかった…

「正気？おまえ片足のない男を見たのか？まだ正気を保っていたのか？」

まあ…頭のキレそうな鬼とは言え、こんなものだろうな…

臨機応変に頭の柔さを調節するでもない  
ひたすらに堅物だ…

「まあ…そう言うことだ…場所は分かるが、私が感づくなり、奴も気づいて逃げてしまっただろうな…融こっこは目に見えている…あれでなかなか頭のキレる奴だったからな…」

鬼は刀を鞘に収め、暫し考えていた…

すると、残像を露わにし、私が何処かと辺りを見渡し、正面をむき直したそこに闘牙が、より接近して立っていた

「おまえ…天狗じゃないな？何でも良いが、把握しているなら協力してもらおう」

冷や汗が滝のように流れた…

考え直せっ

あんな男…見殺しにしても差し支えなかつ…

「ああ…思い出したぞっ！…その片足のない男なら、その木陰にいる…隠れ蓑を覆ってな…」

闘牙はニヤリと笑った

「教えてはダメだろ？あの男は感づいて逃げてしまったんじゃないか？どうするんだ？」

し、しまった…  
泥沼に足を掴まれたような…

私はこんなときにまた上の空になってしまっていた

鬼がなんだ…話が見えていないのではないかつ  
などと脳内革命は収まりがつかなくなっていた

## 壹拾伍

天狗ではないにしろ、私は屈強な霊媒師。後々やれ鬼を討ち取った霊媒師だの、無益な介錯を廃止させた霊媒師だの、やんややんや謂われるのは適わんからな…

しかし、選択肢として最善なのはやはり、この鬼を倒す。と言うことになるだろう…

だってそうじゃないか？  
あの男を売ったとて、恨みを買うは、なんだか情けないはで…たま  
ったもんじゃない

かと言って

鬼に協力するフリをして、探し回ってみるのも時間の無駄だ



何より私は天狗に会いたいのだ

「どうやら…私を天狗だと思っていないようだが…それは残念な話だ」

闘牙は一瞬後退りした  
これこそまさに勝機と確信し、私は幻惑を見せた

闘牙の主人が鬼達を八つ裂きにする幻惑だ

「う、ううっ…やめろっ！！上様は妖怪を愛でて下さる方。貴い方。う、ううっ…」

底冷えのする鬪牙の殺意が反転し、魑魅魍魎を下回る物悲しさを発した

「おいっ！おれはここだっ！！さっさとやってくれえ」

山の隅から隅まで鬪牙の哀愁に満ちていたが故か？半ば遊び慣れたあの男には耐えられなかったのだろう…

「黙れっ！！私はお前になど興味はない…首を…首をよこせっ！！」

…なるほど、鬪牙とはどうやら真面目な鬼のやうだな

## 壱拾陸

「お前に欲情などしない。達磨にしたとて同じだっ！！」

闘牙の牽制にも関わらず、男は片足でケンケンしながらこちらに近づいてきた

「旦那…すいません。せつかくの蓑が台無しになっちまって…こう言うのって第三者にまでバレると効果なくなるんでしたよね？」

まあ…効果はなくならないが、疑心暗鬼に捕らわれやすくなるだろう…いずれにせよ、この男の問題だ

「あんたが天狗なのは分かったよ。聞いてくれ…こいつをさっさと

処刑したいんだ…だのにこいつと来たら、俺を女とんでも介錯できるのか？とか聞いてきやがってっ！頭が可笑しくなりそうなんだ…」

なるほど、その結果が達磨と言っわけか…

なんともおぞましい現実だ…

しかし、流石と言えないわけではない…  
生きとし生けるものへの誠心誠意のこもった慈愛とも言える…

「ち、違っんだ…こいつは鬼畜生だから、絶対俺に抵抗の余地があ

るから、敷かないだけなんだよ。わかるだろ？なっ？なっ？別にマジで達磨にしてほしい訳じゃないんだ。魅力の話だろ？この鬼畜生みたいな魅力が俺にもあるんですぜ」

命乞いもここまでくれば、立派な道理か？

図らずも仲介役となった私に何か善い裁きの巧妙があればいいのだが

## 壱拾漆

しかし、なぜ処刑場をこんな山奥に移したんだろうか？

「おいつ、鬼よ？なぜこんな山奥を選んだのだ？」

鬼は苛立ちを隠せない様子だ

「私がつまらぬ情をこいつに抱いてしまったからいけなかったんだ。死ぬ前に見ておきたい景色があるなどとぬかすから、連れてきてやったのに…女と思えたの何だの…気色の悪い奴でっ」

闘牙は不甲斐なさを露わにし、膝から崩れ落ちた

先程の私の幻術も相まっていたのだろう…

鬪牙の身はいかほどか小さく見えた

「油断したか…人の情とは鬼には些か甘美すぎたようだな…主人への面子もあるだろう…さて、おまえに残された道は2つある。この男の首を取るか、この男と供に逃げるかだ」

仲介役と言いながらも、半ば他人行儀で、配慮に欠ける冷たさはあったにせよ。命のやりとりに深入りは禁物だ…と私は思ったのだ

化けて出られかねんからな…

「ちょ、ちょっと待ってくれよつ？旦那つ。そう言われると俺の気も変わるつもんよ…俺としては、鬪牙とも旦那ともおさらばしたいんだよなあ…」

ここで彼の男がごね始めた…まあ、この事態で冷静なのは評価に値するが、確かにな…私も闘牙も霊力ないし魔力を携えているだけに、男もやけっぱちなのだろう…な

「私は構わんぞ？後は鬼とお前次第だ」

闘牙はスクツと立ち上がり、男に短刀を向けた

「そう言うことだ。この天狗とはこれっきりにして、お前を処刑する…」



今まで闘牙が醸し出していた冷たい空気は、辺りにまだ残っており、まるで彼の男の最期を暗示するかのようだった

## 壹拾捌

「そりゃねえよっ！元の木阿弥じゃねえかつ！確かによ？最期に見たい景色はこの山奥にはないかな？あるにはあるんだよ…なっ？」

男は血相を変えて、私にその旨を訴え始めた

死の覚悟と言うのは、第三者には見せたくないものなのか？  
単に生きながらえたいだけなのか？

この男には人の情を揺り動かす何かがあるのだろうか？

私も鬼のように孤独に苛まれていたかのようにだ…

「男よ…名は何と言っ？」

男は少し残念がってはいたが、渋々ながら私の問いかけに応えた

「テングと申します…いつからかの記憶がないんですが、どうしても生き延びなければと言っ謎の使命感に駆られております」

テング……

彼の男の心持ちからは「テング」と言う響きばかりしか感じられず、私の探す天狗とは別のものな気がした

「それは災難だな…しかし、テングとはまた因果な名だな？私は今この山の主である天狗を探しているのだが…心当てはないか？」

と、私のテングに対する問いかけを横取りするかのように、鬨牙が話に割って入ってきた

「待て待て、貴様は天狗ではないのか？」

テングに向けていた短刀を私に向けた鬨牙は、些か矛先が鈍っていたようだったが、それよりもこれは、厄介なことになった…

## 壹拾玖

「そっだ…天狗ではないが、お前も味わっただろ？私の幻術を…」

鬪牙は刀を収め、少し萎縮したようだ

「それはそっだな…仕方ない。腑に落ちないが、このテングとか言う紛らわしい奴を葬ることに専念しよう…」

テングはそれを聞くなり、キッと鬪牙を睨みつけた

「あんたはもうダメですよ。法を犯している。あの主人の設けた御法度に寄らずとも、罪人を外に連れだした時点であんたの碌は潰れちまってるんだよ…ハハッ…口から出任せのつもりが、嘘から出た

誠になっちまったか：ハハッハハハッ」

テングは訳も分からぬ様子で泣きながら崩れ落ちた…

そう言えば、片足はなかったな…

「き、貴様あつ！！そこまで企てていたかつ？！腐れ外道がつ！！」

闘牙が口からどす黒い気体を髑髏のように吐き出した

やがて、テングの寸で迄漂ってきた髑髏の気体は、テングの失われた方の足の太股に焼き付いた

「う、うぎゃあっ！！な、何てことしやる？！あ、足が腐っちまう……」

闘牙はニヤリと笑い、刀を抜いた

「さて…テングよ？これからお前のその残された足は察しの通り腐っていくが、一つだけ助かる術がある。それはこの私が、お前のその足を腰元から切り落とすことだ！！」

テングはヒィヒィ言いながら、私に歩み寄ってきた

「だ、旦那…助けてくれえ…お、俺が死んだら、この鬼畜生が付きまとい始めやすぜ？除呪して下さい…」

テングの太股が、蚯蚓のように血管が浮き出て腫れ上がり、青黒くなり始めた…蠢く血流は呪いのそれをいたましく、私に印象づけた

「おいっ、そんなことはないから黙って見ていてくれないか？去ってくれても良い。この男さえ死ねば、私は自由の身だろ？ハハッ…何て奴だ。上様に合わせる顔などない…苦しんで死ねっ！！」

忠義心の高さ故だろうが、私には単なるエゴにさえ見える…それほど禍々しく、妖気に苛まれた空間となっていたからだ

「あゝあっ…あゝああっ…い、痛いっ！！助けてく…れえっ」



呪いはテングの身体を這うように巻き付け、やがて、男は絶命した…

テングと言う謂われは、お調子者故のあだ名か何かだろうか？  
因縁めいたものを感じずには居れなかったのだが…

## 貳拾零

静まり返った山の空気は濁っていて、体に入る度に胸焼けがしていた…

私としたことが、呪いのとばっちりを喰らってしまったのか？

「お、おえーっ…」

私は悪気を体から追い出すように、吐き出した…

そう言えば、昼間から何も食べていない…

よって、何も出ない…  
空嘔吐だ…

「ハッハッハッこの程度でヘコタレるとはな…人が死ぬのは耐え難いのか？そう言った意味で天狗ではないと言っのなら、こちらの考え違いだが…」

意識とは別の何か…人の生き死には、私ほどもなれば動じるに値しないが、この死は何か違う…

それは、むしろ熟達した感性故の憤り…と言っか。胸糞の悪さと言っか…

こんな鬼畜生にやられてはまずい奴だったのではないか？  
闘牙めの主人の器では収まりきれなかったのではないか？  
呪いの類を使うには早すぎたのではないか？

もしくは…

「因果ではないか？こいつの名もまたテング…当たり障りない呼び名と通っていたようだが…もしや…力を失った天狗ではないか？なあ？」

どうやら、闘牙の奴はちゃんとした儀を踏まずに処刑を行ったせい  
か。気が高ぶっているやうだ…

私も…若干なりの焦りから、このテングは透明熊の手で成り代わっ

た天狗自身ではないか？と考えずには居れなかったが…

闘牙の傲りにも似たやつかみが、別の考え…つまり、これは単なる罪人だという確信を促していた

## 貳拾壹

「安易に物事を決め込まない方が良い…もし、このテングが本物の天狗の魂を宿していたにしても…時既に遅し…と言うわけだよ？」

高価な御品物を無碍にしたやうな…それを叱りつける親のやうに私は鬪牙を諫めた

鬪牙はぶるぶる震えだし、高笑いを始めた

「あつ…ハハハハツ！！そうかつ！！それで貴様は残念そうな顔をしたのだな？それは悪いことをしたな？どうだ？これから主人の元へ帰るが、お前も来るか？何…天狗の所存の有無なら主人の元に居ればいくらでも調べやうがあるだろ？」

主人か…そう言われてみれば、こやつの主人とは如何なる者なのか？  
気になってはいたんだが…

私としては、それ以上の智に用はないのだ

「いや…お前の主人には厄介になるまい…因みにお前の主人はどんな奴なんだ？」

鬪牙は私のそれを聞くなり、水を得た魚のやうにまたもや、高笑いをかました

「天狗だよっ！！本物の天狗さっ！！きつとこのやりとりもお見通しさっ！！ハハハハッ！！間抜けな奴め。気が向いたらで良い…気が向いたら、屋敷にでも顔を出すが良いさっ」

スツとテングの首を切り取り、鬨牙はそれをヒョイと持ち上げ、忍者のように木々を足掛けに、駆け抜けていった

赤っ恥か…

さても今の私の顔色は天狗のそれほど赤々と紅潮していたのだろう



## 貳拾貳

テングの胴体を置きっぱなしにした鬪牙の奴は、この殺伐とした山中にせめてもの余韻を、とても思ったのだろうか？

片足と首のない軀、もしや天狗の魂が宿っていたのではないかと思うほどだったが…藁にも縊るとはまさにこのことだったのだろうか…

「腑に落ちん…しても腑に落ちんな…あの鬼畜生に何か一杯食わせねば…このテングという男…素性は知れぬが、何奴だったのか…死者を辱めるのは私としても気に病むが…」

私はテングの軀に寄り、そつと触れた…

「しまったっ!!」

私は万物に通じる霊媒師、ましてこのテングの生への執着心を侮っていたことがまた、拍車をかけた…

首と足が生えてきおった…

恰も、素性が知りたくば俺に聞けと言わんばかりにだ…

目を覚ますのだろう…

しかし、首まで生えては…鬪牙の奴が持ち帰った首は何となるやら…妙に小気味がよくなった

## 貳拾参

不可抗力のなせる業であつたか？

テングの体は元通りとなつたはずなのだが、ピクリともしない…

「所詮は抜け殻か…霊魂はすでに黄泉の国へ旅立つたやうだ」

私は意味深に空を見上げた

人の死というのは、どこか儚く、今はそれより齒がゆさの方が勝つていた…

テングは黄泉の国で天狗に会つたやもしれん…  
私は天狗になりたいと言つに…

透明熊の手…この妙技を知らぬが仏か？

「天狗めっ！！私を恐れておるか？！」

私は有らんばかりの声を振り絞り、高らかに叫んだ

「…んっ？んんっ…旦那？何言ってるんだ…俺は別に旦那を恐れてはいないよ？」

テングの奴が甦ったか…  
なにやら酷い勘ぐりを起き抜けにやっているやうだが…

説明…のしようはあるのだが、それに際しての霊力の鈍り、位を狂  
わせることにもなりかねぬし

そのままテングの思惑を転がしてみやうか？

はてさて

なんとも因果なものとなつたな…

## 貳拾肆

「旦那っ、足まで治ってるじゃないですか？ いやぁ…旦那には世話になりっぱなしだなぁ…そうだっ！旦那に耳寄りなネタがあるんですが…」

瓢箪から駒とでも言うか…寝耳に水やもしれんな…

私に耳寄りなネタと言えば、天狗についてくらいなものか？

はて？こっちのテングには話したことあったらどうか？

「ほう…何でも良いが、つまらぬ事だったら承知せぬぞ?」

半ば冗談混じりで、私もテングの話に構えてみることにした

「へ、へえ…お気に召しますやら、少々疑わしくなってきたが  
…闘牙の奴の主人、本物の天狗…って俺の事じゃなくて、大妖怪の  
天狗ですぜ?天狗なんですぜ?しかし、おかしな事を言うんですあ  
…この俺が天狗だと…天狗の魂はこの俺だと言うんですあ…それで  
上の空でみんな俺のことをテング、テングと呼ぶんですあ」

ふむ…これはどうやら、このテングと言う男は透明熊の手を使って  
いるやうだな…

記憶が一部失われている…

時に…いや、ほとんどの場合、そう言った後遺症が現れるものだが…

困ったな…

つまり、天狗の肉体はあれど、それと入れ替わった日には、この男の魂を我が肉体に入れると言うことになるが…

「そうだったのか…もし、その話が誠ならば、私にも考えるところがある…どうやら、その肉体では遊びがすぎているか何か知らないが、天狗の魂が充分に生きていないやうだ…」



替わるべきか…替わらぬべきか…

このままでは天狗の恩恵が私には伝わらない

ここで私とこのテングが入れ替わり交渉すべきではないだろうか？

しかし、天狗の魂でこの程度のものなのだぞ？

この男の世慣れ果てた体に私の魂が入って如何なるものだろうか？

…どうしたものか？なぜか、話が疑わしくなってきた

## 貳拾伍

手っ取り早い話、その鬪牙の主人である天狗に会えば良いのだ。と言っ風に落ち着き、私は寸でのとこで透明熊の手をテングに使うのを控えた…

仮にテングが天狗であっても、私は遊び人の肉体に入るわけだからな…

余りに無謀と言っものだ

斯くして、私達はそれぞれの思いを秘めて、山を降りることにした

「はあ…俺は首まで切られてたんですか…いやあしかし、巖吉の旦那は人間なのに凄まじいなあ…達人っつーか…はあ…」

テングの奴がホントに天狗だとするなら、私は本物の天狗に認められたことになるか…

「時間旅行をしたこともある。私がこの辺りを司るが故に言の葉がときに先走ったものになるのだ…もしかすると、処刑などもまだこの戦国時代では確立されてはいなかったかもしれない」

テングは呆氣にとられすぎているやうで、私よりももっと遠くを見つめていた…

「へえ、時間旅行かあ…旦那はアヘンをやるんですか？実力者ともなれば、世離れするんですかねえ…」

アヘン…？

いや、時間旅行は時間旅行だが、気がおかしくなって意識がどこかへ行ってしまったとしても言いたいのか？

「マジギレだ… テングよ？ 私は時間旅行を実際に行っている…」

私が鋭い目つきで睨むと、 テングは恐れおののき尻餅をついた

「…マジギレ…アヘンの効き目がですかい？ お気持ちはわかりやすが…俺はアヘンは…あれ？アヘン…アヘン…どうだったかな？袖もとにあつたかもしれないです…」

するとテングは、袖もとから三角に包まれた紙切れを取り出した

「持ってましたっ！！さっすが旦那だな…抜け目ねえや…良質なアヘンですぜ？」

「き、貴様あーっ！！」

私はテングの止まらない勘違いに腹を立て、手を振り上げた…そのとき

「ソウンよ…それは私のアヘンだ。やるでない…わかったな？やるでない…」

山を揺るがすような深い声が私のそれを制止させた

「天狗か？」

屍餅がついていたテングは、沃さと立ち上がり、声に反応した

「ああ…そうだった俺はソウンだったか…天狗様っ！！あんたに会いたって旦那を今から連れていきます故、了承くだせえ」

「良からう…あの鬪牙から逃げ切るとは…さすがの知恵者だ…バカ比べには及ばずともな…ハッハッハッハッ」

「ありがてーっ。ありがてえこっです。すぐ、今すぐにも旦那を  
そちらに連れて行きます故」

ホロリと涙が一筋頬を伝った。私は何を勘ぐっていたのだろうか？

## 貳拾陸

天狗…まるで天狗が出生してから現在に至るまでを振り返りたくないやうな…

そんな気分だった…

仮にこのテング、ソノウンの奴が実質の天狗の魂を宿していたにせよ

完全なる客観性を問うならば、現在、天狗にあるソノウンの魂はすでに溶け合い、仏の域に在るではないか？

「フフッ…」



私は含み笑いを浮かべた

「どうしたんですかい？旦那。もうすぐ屋敷に着きやすが…旦那あ…あんたやっぱり…アヘンを？」

こいつはさっきから、アヘンアヘンと…

このソウンもまた天狗の魂と溶け合い…立派な罪人となってしまうか？

遊び人にしては、勘ぐりが過ぎる…

残念なことだ

「アヘンなどとは、浮き世にも及ばぬ世間知らずの帳尻合わせに過ぎん…その点私は心配あるまい」

ソウンはしばし、笑顔のまま抜け殻のやうに静止し、すぐさま俯いた

「さいですか…旦那は意外にハイカラなんですネ…お節介焼きの俺を許してやってくだせえ…あっ着きやしたぜ？」

なんとも、調子の狂う奴だ…

眼前には巨大なお屋敷、囲ってある塀を見る限り、一万坪はあるだろうか？果てしなく広い敷地には、作り込まれた頑丈な門が立ちはだかった

不死鳥や仏などが、浮き彫りに縁取られた門…

ハイカラな私には物足りないはずの古風さであったのだが…

胸を鷲掴みにされたのは不思議なことだった

## 貳拾漆

「御主人。旦那を連れてきましたぜ？」

ソウンの奴が何とも嬉しそうに天狗を呼んでいた

まあ確かに、天狗の軀への親近感は、魂が惹かれるのだろう…他よりはあるが故の振る舞いとなるだろうか？  
アヘンの所為ではあるまいて

ギィッと門がこちらに向かって開いた

そして、開け放たれたそこには鬪牙が腕組みし仁王立ちで立っていた

「ソウンさん…いや、天狗様か？あんたの言った通りだ…日時から条件まで寸分の狂いもなく、その敵吉とか言う霊媒師を連れてきた…あんたが道楽野郎のソウンと透明熊の手を交わすと言ったときは妖怪等も戦慄きっぱなしだったが…あんたの命の重み、妖怪等にもしかと伝わったよ…」

ソウンは鳩が豆鉄砲でも喰らったかのように、面食らっていた

「ああ…そうだな。それよりも客人だよ？」

門を抜けると、銀色の石畳の道があり  
その辺りには砂浜から集めてきたのだろうか？  
木目の細かい砂が敷地内を埋め尽くしていた

肝心の屋敷…そこまでで、石畳の道は途絶え、階段が5段ほどあつ

た。圧倒されると言うよりは…ハイカラで、この時代の先端にいますよ？と語りかけてくるやうな

見事な寺構えであった

「どっいつことだ？私を担ぐなどと、天狗は今何となっているのか？」

闘牙は少し考え込んだ…

「っ、つまりですね？一芝居だったって訳ですよ？天狗様の御心のままにです」

「天狗に会えば分かるわけだな……」

闘牙は静かに頷き、先を急ぐような表情を浮かべた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0317y/>

---

透明熊の手

2011年11月24日17時55分発行